



介護担うプロの誇り

広島の若手職員ら技術競う大会

カウントダウン
2025年

10年後の超高齢社会を考えるには、250万人の介護職員を確保する必要があるという。だが、介護の現場は慢性的な人手不足だ。この仕事の魅力を多くの人に知つてもらおうと、若手職員らが介護技術を競う「第一回ひろしまケアコンテスト」が2月下旬に開かれた。出場者から伝わつくる情熱と誇り。こんな想い手があつてこそ、「尊厳ある老後」がかなえられる。

（標葉知美）

0人の観客が熱心に見入り、一人一人に拍手を送っていた。

厚生労働省によると、2013年度の介護職員数は約177万人。25年度には約30万人不足すると国は推測している。いかに人材を確保し、育成に力を入れるかは社会的な課題だ。

「介護の現場では、職員市内の高齢者福祉施設で働く勤務歴5年未満の職員26人が、「食事」「排せつ」「入浴」の3部門で競つた。6人が審査員を務め、手順や声掛け、笑顔で排

要介護者に見立てたモデルを相手に7分間ずつ試演。大学や専門学校教員たち計6人が審査員を務め、手順や声掛け、笑顔で排選手たち。会場では約20

0人の観客が熱心に見入り、一人一人に拍手を送っていた。

各部門で優秀賞に輝いた受賞者

【入浴部門】

吉田佳代さん(21)

＝東区の介護老人福祉施設サンヒルズ広島勤務

高校生のとき、大きな病院を受診した。受付のフロアを見渡すと周りは高齢の患者ばかり。「ああ、日本で本当に高齢化社会なんだ」。このとき、このお年寄りたちを支えるのは自分たち看護なんだ、と自然に思えたのだとい

高校在学中にホームヘルパー2級を取得し、卒業と

感謝された手紙 宝物



「腰や膝、痛いところはないですか？」モデルに優しく声を掛ける吉田さん

【排せつ部門】

永江伸子さん(25)

＝佐伯区の特別養護老人ホーム石内慈光園勤務

大学で高齢者や障害者の方の暮らしを支える医療福祉学



モデルに目線を合わせながら、笑顔で接する永江さん

【食事部門】

井上あゆみさん(24)

＝中区の特別養護老人ホーム悠々タウン江波勤務

「お湯が散つてしまつたので、ズボンを替えさせていただいていいですか？」利用者が排せつを失敗してズボンを汚したというシチュエーション。相手が恥ずかしくないよう、さりげなく語り掛ける。観客まで、心が温くなる笑顔で。大學生のとき、大きな病院を受診した。受付のフロアを見渡すと周りは高齢の患者ばかり。「ああ、日本で本当に高齢化社会なんだ」。このとき、このお年寄りたちを支えるのは自分たち看護なんだ、と自然に思えたのだとい



モデルの表情を注意深く確認しながら、食事の介助をする井上さん

父の死胸に日々成長

つたことが今も悔やまれる。自分に介護の知識や技術があれば、もっと父の苦しみを和らげられたんじゃないかな…。悔しきをきつ

らま頑張ります」。思わず声に涙がこぼれる。就職して4年。日々の業務に手

応えを感じられるようになつたとき、職場の上司に後押しされて出場を決めた。

介護職を目指したきっかけは、父の死だった。高校1年生のとき、原因不明の難病に父が倒れた。1年間入退院を繰り返し、

「初心に戻れた。明日からまた頑張ります」。思わず声に涙がこぼれる。他人に介護されると、つたつて抵抗があると思う。こちらがケアさせていただいているという思いを忘れず、これからも利害関係と向き合つて、いきた

悔はしていません

忘れない出来事がある。入社1年目のある日、

暗いイメージがあるけど、利用者や家族に頼つてもらえる誇りの持てる仕事。後

食事ができないほど弱つていた女性に炭酸が飲みたかった」と言われた。「人生最後の望みだったかも。上司に相談すれば何かできなかつたかもしれないのに、しな

く。人の死に立ち会うこと多い仕事。責任の重さを

亡くなつた。後悔は今も続つかみしめながら、現場に立つ。

「大変な仕事やな」とつたことをよくあつた。けれど、少しずつ介護の喜びを感じられるようになつってきた。

宝物がある。数ヶ月前、80代の女性の担当から外れたときには女性の娘さんに手紙にきれいな字で「ありがとうございました」とさいました。母と私は、吉田さんに心から感謝しています」とあつた。うれしくて大切にしまつてある。「愛はいい機会。そろそろ新人気力を卒業して後輩のお手本にならない」と。来年1月、介護福祉士の資格試験が待つてい